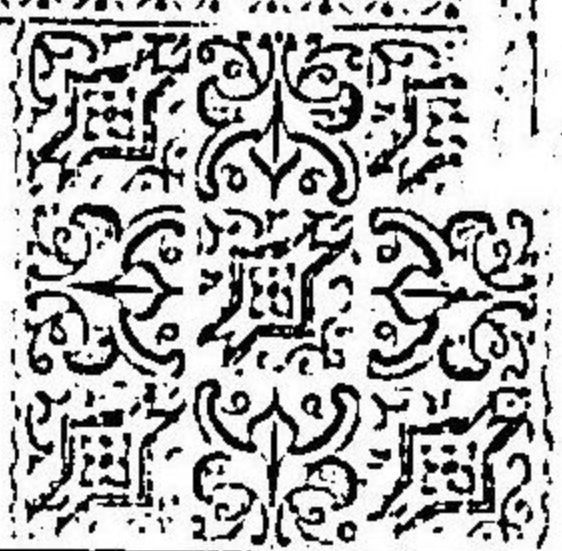
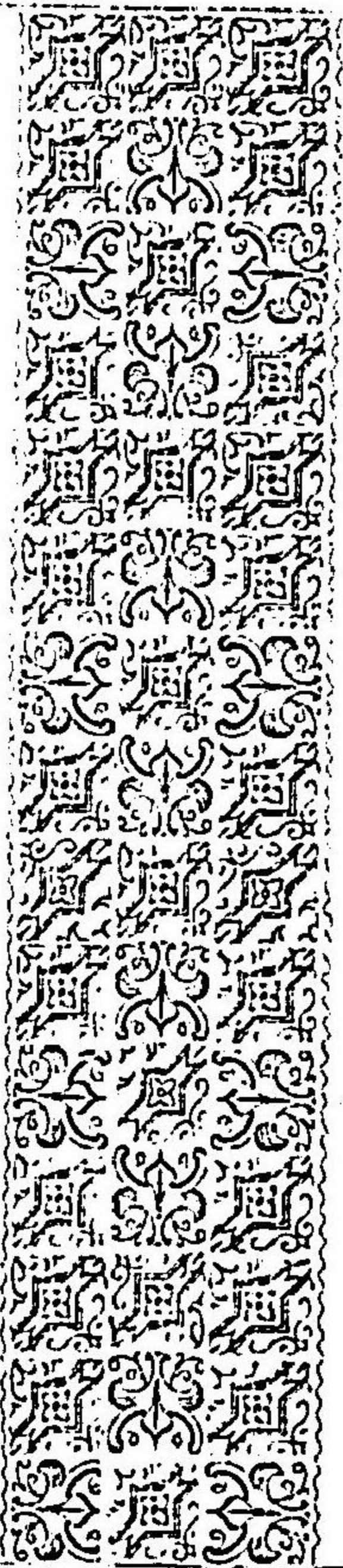


155

666



確 實 保 證



耳病即治新法書

發兌
大學院書房

東京
TOKYO
LIBRARY
耳病即治新法書

● 本書の心魂

此病を憂ふる人決して勤なしとせず、然れども此病は他の疾患に比して苦感稍冷かあるものあるより、往々其治療の時期を過つて、其輕易なる者もあたら重症の域に進め、而して其大事に立至りたるに當つて、周章狼狽其治療に奔走するも既に其病位を高めたるを以て、治効決して速かならず、此時ふ當つて始えて其軽かりき當時を蔑りたるを憾むも最早詮方あらまして、或は終身不具の人とあり、或は平素多病の人とあるは浩嘆不堪へざる處あり、總べて疾病は花の開くが如く、雪の積るが如く、少しく其治療の時を遅るゝあらば、忽ちにして疾病の華は爛熳として開き、患苦の雪は疊々として積ね、容易に之

れを解く能はざるに至る。去れば輕症の病は重難の患苦を生むの母なりと知り、早く之れが驅除の法を講むべきあり、然れども或は山村陋里に僑居して醫家を訪ふに不便あるの人、或は財政の妨ぐる處ありて醫藥を充分に得易からざる人に在ては、好し急治の必要を知るも、荏苒其時期を輕過して、知らずく大患に陥るもの又以て少しとせし、殊に此病は一朝誤れば聾耳不具の人とある實に可恐疾患なれば、殊更急治の覺悟を要すべきあり、然れども事情之れを妨ぐるの止を得ざるより、往々此禍害に逢過する人少しとせず、余永く之を憂ひ茲に簡易なる其治療法を蒐めて本書を編す、去れば記する處の藥劑は悉く藥舖に鬻ぎつゝ、ある處の低廉にして安然なるもの、み、仕方は悉く素人の實行し得べき輕易にして至便なるものあり、而して此法は皆永く實驗して其確効を知るものと、古卷に明言せる珍法を併

載し、加ふるに千草園發兌の實用奇術新報上に赫々として隠れなき聾耳を治愈して、厚禮と證明とを得たる確實なる呪法とを以て遂に此一編をおせし、讀者乞ふ宜敷此意を諒せられ、廣く其實用を供せらるゝ、あらば著者の榮之れに如くものあらむ、而して本書は他の玩弄偽書と異り、永く實驗を経たる真誠なる新法書なるを以て、無限の配冊は少しく其價値を墜すの嫌なき能はざるを以て、茲に初版三百巻を刊するに停むれば、其價從つて低廉ならざるも、乞ふ本書の働を愛して書櫃に藏を給ふあらは幸甚。

明治廿四年中元の日

編者識

● 聾全治の御禮

(實用奇術新報社の許
可を得て本書に掲ぐ)

冠省陳者私事無て貴社御發兌の實用奇術新報を愛讀致居候處本報第
四號中田澤日本居士の筆に係る聾を聞えさせる法を拜見致其御法通
り試行致候處實に御吹言之通り好結果を得難有候是れ單に貴社に如
此良書有之候所以と誠に感銘奉萬謝候備又貴社々員田澤日本居士と
申さるゝ何所の御住所にて實名何と申さるゝか詳知致度何卒御
教示被下度又近刊の新報上へ此書面御掲出相成聊か貴社に名聲を測
り貴社の御厚志の萬分を謝し度依て右申入候早々頓首

加賀國石川郡字室村

明治廿四年六月九日

安 永 庄 次

千草園雜誌社

御 中

書 中 法 目

- 耳だれ即治法
- 耳の霜焼を治す法
- 耳の鳴るを止める法
- 耳の中へ物入たるを治する法
- 耳より膿出るを治する法
- 聾を直す奇法

●耳だれ即治法

(第一法)

耳たれには鱈の頭を黒焼にして飯粒に交せ合せ其耳たれの出る耳の付根へ外より貼り置くへし直る事實に奇妙く

(第二法)

雨のか、らぬ所に生へたる麥を取り能くもみ其液を三滴位つ、晝夜三回注入まべし四五日間にして必ず全愈する一大奇法あり

(第三法)

耳たれを直に最も簡易なる法の生大根の搾汁を紙の小縷に付けて耳にさまへし必し奇効あり

(第四法)

耳たれを簡易に治愈せんと思は、蟬の脱壳を細粉をかし胡麻の油ふ

て適宜に解かし耳たれの出る處へ一晝夜二三回二三滴宛注入する時は早くは二三日遅くも五六日の内には必ず全治する事奇妙と云ふべし

●耳の霜けやを治す法

生姜を搗り仰し其汁を搾りて少し温を毎日二三回宛塗抹まへし二週間の後には全治まべし

●耳の鳴を止める法

食塩を温を白木綿類にて敷したる枕の中に入れて卧べし苦し冷たれば又温めて用ゆるか或は取り代へて用ゆべし

●耳の中へ物入たるを治する法

耳の中へ物の入たる時の唐弓の弦を切小口へ膠を付て差入れて出まべし若し弓弦をかき時の觀せまりの先へ膠をつけて出まかり又竹の管

にて強く吹てもよし

●耳より膿の出するを治す法

(第一法)

一 枯凡

一 芩

一 黄丹

五分

を細末にして耳の中へ吹入るべし又腫れ痛むに効あり血の出るに
の竜骨を粉とあして吹入べし

(第二法)

倍子粉(のふし)を耳の中へ吹入る、か或は古綿を黒焼して綿1包み
て耳の中へ入て充分に膿を取りて後石炭酸か又ハ硝酸銀液の極く稀
薄なる者にて洗ふべし

●聾を直し奇法

(第一法)

聾を直し奇法とは則ち附子(藥名)を酢1浸し置削りては小指の如く
あし耳へ入置時ハ必らず聞へる者ありと同患者ハ須らく御試用ある
べし

(第二法)

男子からば牝猴の頭を黒焼にして素湯1ふて吞女子からば雄猴の頭の
黒焼を吞むべし治る事妙あり

(第三法)

一 虱 噫 急 如 律 令

耳の聞へざる時右の呪符を縦二寸横五分の白紙に書き清水にて吞む
べし

2N-71

明治廿四年九月三日印刷
同年同月四日出版

發兌元 大學院書房

橫濱初音町一丁目六番地

全所

發行兼編輯者 松尾源之助

東京京橋區木挽九丁目六番地

印刷人 青山藤四郎

橫濱野毛町二丁目

賣 捌 千草園書籍部

155
666

060155-000-7

特24-94

耳病即治新法書

大学院書房

M24

CBK-0034

